

## 戦後セメント彫刻の保存修復と活用 — 堀内正和《横の作品》を一例にして —

---

代表研究者 橋口 由依  
神奈川県立近代美術館 企画課 学芸員

### 研究要旨

1824 年にイギリスで発明されたポルトランド・セメントは、1875 年に国内での製造が始まり、1900 年代初頭から美術作品の材料として使用され、戦時下には金属に代わる材料として関心を集めた。1951 年には東京都が主催、小野田セメント株式会社が後援となって、出品作家に材料として白色ポルトランド・セメントを提供し、「野外創作彫刻展」（日比谷公園）を開催した。同展はセメントが彫刻の材料として一般化していく契機となり、全国的な野外彫刻展の流行とともに、セメントは戦後彫刻とパブリック・アートの展開に重要な役割を果たすことになった。しかし、野外彫刻展の流行から半世紀が過ぎた現在、公共空間に設置されたセメント彫刻の多くは経年劣化を理由に取り壊され、保存修復とドキュメント・アーカイブが喫緊の課題となっている。

本研究では、神奈川県立近代美術館における彫刻作品の保存修復活動の一環として、戦後の抽象彫刻を代表する彫刻家・堀内正和（1911–2001）によるセメント彫刻《横の作品》（1952 年、神奈川県立近代美術館蔵）の修復を行い、その成果を公表することで、戦後セメント彫刻の保存修復について問題を提起するとともに、その保存と活用の方法を探った。また、修復の前後に作品の 3D スキャンを行い、スマートフォンによる簡易 3D スキャンを彫刻作品の状態記録およびドキュメント・アーカイブの一つの方法として提案した。

---